再考・小田実とベ平連
ベ平連への参加と「難死」の思想・「加害」の論理

Reflections on Makoto Oda and Beheiren：Participation in Beheiren, the Ideology of Meaningless Death, and the Logic of Self as Aggressor

平井一臣

HIRAI Kazuomi

はじめに
❶「満州事変の頃」の世代
❷「満州事変の頃」生まれた世代の戦争経験
❸「『難死』の思想」再考
❹小田起用の背景（1）
❺小田起用の背景（2）
❻小田にとってのベ平連
❼「加害」の論理の形成
おわりに

［論文要旨］

1965 年 4 月に発足したベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）は，戦後日本における市民運動としての反戦平和運動の展開のなかで大きな役割を果たした。このベ平連の運動を牽引した知識人が，ベ平連の「代表」となった小田実だった。

これまでのベ平連研究のなかでも小田の思想と行動はしばしばとり上げられてきたものの，彼がベ平連に参入した経緯や，難死の思想や加害の論理という小田の思想の形成のプロセスについては，依然として未検討の部分が残されている。本稿では，企画展「『1968 年』無数の問いの噴出の時代」に提供された資料のなかのいくつかも利用して，ベ平連に参入するまでの小田の行動の軌跡，ベ平連発足時の小田起用の背景，難死の思想と加害の論理の形成のプロセスや両者の関係といった問題を検討する。

このような問題意識の下に，本稿ではまず小田の世代的な特徴（「満州事変の頃」に生まれた世代）に着目したうえで，この世代特有の経験と結びつきながら難死の思想がどのように形成されたのか，その軌跡を明らかにする。次に，ベ平連発足に際しての小田の起用について，小熊英二や竹内洋に代表される従来の説明を検討し，ベ平連の代表として「小田実か石原慎太郎か」という選択肢は存在しなかったこと，60 年代前半の小田の言論活動の軌跡は戦闘的リベラルに近づく軌跡であり，ベ平連に結集した知識人のなかでの小田に対する一定の評価が存在していたこと，などを明らかにする。

さらに，これまで 1966 年の日米市民会議と結びつけて説明されてきた小田の加害の論理について検討する。実は，加害の論理はベ平連参加以前の段階で小田の問題意識のなかに存在していたが，むしろ回答困難な課題と小田は捉えていたこと，この問題に小田が積極的に向き合うきっかけとなったのが沖縄訪問での経験であったこと，そして加害の論理は当時の小田特有の考え方というよりも，当時の運動のなかで練り上げられていったものであったこと，などを明らかにする。

【キーワード】ベ平連，小田実，難死の思想，加害の論理

はじめに

ベ平連［ベトナムに平和を！市民連合（発足当初は，市民文化団体連合）］は，1960年代後半から70年代初頭にかけての日本におけるベトナム反戦運動を担った市民運動団体であり，革新政党や労働組合を中心としたそれまでの反戦運動や平和運動とは非常に異なる運動スタイルを採用し，成長を遂げた。いや，ベ平連に対して団体という用語は必ずしも適切ではない。それは不定形な運動体と呼んだ方がよいだろう。東京のベ平連だけでなく全国各地に地域ベ平連が存在しており，また，個々のベ平連は会員制度をとっていたわけでもなく，個々のベ平連間の関係もゆるやかなネットワークの関係だったからである[(1)]。

本稿は，ベ平連の運動がなぜ1960年代半ばに登場し広がっていったのかという問題を考察するために，ベ平連の運動で中心的な役割を果たした小田実の思想と行動を取り上げる。小田を中心にベ平連の運動を説明することには疑問が投げかけられるかもしれない。近年の地域ベ平連に関する研究が物語るように，ベ平連の運動は決して小田実のみをもってしては説明できない広がりと複雑さをもっていたからである[(2)]。しかし，ベ平連の運動に小田が与えた影響の大きさを考えるならば，小田抜きにベ平連の運動を説明することもまた問題であろう。さらに言えば，本論で明らかにするように，これまでの研究には，小田とベ平連の関わりについて必ずしも正確ではない理解も見受けられる。ベ平連研究を今後一層すすめるためにも，小田の思想と行動について改めて光をあてる必要があるのではないか。

本稿では，小田及びベ平連の中心的な担い手の世代的な特徴を検討したうえで，ベ平連参加以前の小田について，彼の代表的な評論となった「『難死』の思想」に至るまでの軌跡を中心に検討する。次に，なぜベ平連のスポークスマン役として小田に白羽の矢が立ったのかを中心に，ベ平連結成の経緯を明らかにする。最後に,「難死」とならんで小田が戦後の反戦平和運動に対して提起した重要な論点と言われる「加害」の論理を考察する。

以上のような検討作業が有する研究上の意味合いについて言及しておこう。小田の「『難死』の思想」についてはこれまでにも多くの論者が取り上げてきたところであるが[(3)]，高校時代に出版した『明後日の手記』からベストセラーとなった『何でも見てやろう』を経て「『難死』の思想」に至るまでのベ平連以前の小田について，必ずしも十分な検討がなされているとは言えない。そのため，ベ平連結成の経緯についてこれまでの研究は，もっぱら小田自身を含む関係者の回想に基づいた記述を行っており，当時の小田の言論活動や人的つながりが視野から抜け落ち，その結果不正確な理解も生じているように思われる。たとえば，ベ平連のスポークスマンとしての候補者として小田とともに石原慎太郎の名前が挙がっていたという説明がなされているが，果たしてそうだったのだろうか[(4)]。さらに，小田の思想のもう一つの特徴である「加害」の論理についての理解も，「『難死』の思想」とどのような関連にあり，また，いつどのように形成されたものなのか必ずしも明確ではない[(5)]。小田の思想における「難死」と「加害」の問題はどのような関連をもち，それはベ平連の運動にどのような影響を与えたのだろうか。

いずれにせよ，ベ平連についての研究は，この間かなり進展してきているとはいえ，小田実とベ

平連の関係というごく基本的な事柄についてさえ，不正確な理解を前提とした議論がなされている部分が少なからずあるのではないか。このような問題関心を出発点として，ベ平連の運動の初発の段階をリードした思想と行動について，当時の小田の言動を中心にたどっていくことにしよう。

❶……「満州事変の頃」の世代

小田の思想と行動の検討に入る前に，小田を含むベ平連に参加した知識人や文化人の世代的な特徴について見ておきたい。小田の「『難死』の思想」が彼の世代認識と表裏一体のものとして形成されたと考えるからであり，ベ平連の運動のとくに初期の段階においては，小田らの世代がもった意味が大きかったと考えるからである。

ベ平連を主導した知識人・文化人たちの世代的な特徴を知る手がかりとして，ひとつの催しを紹介しておこう。ベ平連の運動がピークを過ぎた 1970 年 9 月 18 日，豊島公会堂で「満州事変からインドシナ戦争まで」という集会が開かれた。[(6)] この集会の呼びかけ人には，大江健三郎，小田実，柴田翔，高橋和巳，真継伸彦，無着成恭，武藤一羊，吉川勇一が名前を連ねている。70 年安保をめぐる運動が終わった時期に開かれたこの集会の趣旨のなかには，「私たちが一員である一九三〇年代に生まれた人間には共通するものがあるようです」と述べられている。この世代には「一九三一年，つまり『満州事変』という日本の中国侵略開始の時期に前後して生まれたということ」，「言葉をかえれば，軍国主義，帝国主義，そして侵略戦争を呼吸しながら育ってきた」という共通の世代経験があるというのである。[(7)] 8 人の呼びかけ人の生年は，一番年長の無着が 1927 年生まれ，武藤，高橋，吉川が 31 年，真継と小田が 32 年，最も若い柴田と大江が 1935 年生まれである。

この 8 人のなかで，東京のベ平連の運動に積極的にかかわっていたのは，小田，吉川，武藤の 3 人だった。3 人はまさに「満州事変の頃」に生まれた世代にあたるのであるが，同世代のベ平連関係者は彼らだけではない。鶴見俊輔に話を持ちかけてベ平連発足のきっかけをつくった高畠通敏が 33 年，小田の誘いでベ平連に参加し，『ニューヨーク・タイムズ』への意見広告掲載運動など初期のベ平連の運動を精力的に行った開高健は，30 年生まれである。やはり初期のベ平連の運動に積極的に参加した小松左京も 31 年生まれ，声なき声の会から参加した小林トミも開高と同じ 30 年生まれである。さらに 30 年代前半生まれの世代には，小中陽太郎（34 年），高橋武智（35 年）もいる。こうしてみると，東京のベ平連の運動は，とくに初期の段階にあっては，「満州事変の頃」に生まれた世代によって牽引された運動だったとみることもできる。

ベ平連に関係した知識人・文化人の世代的な特徴についてもう少し見てみよう。興味深いのは，世代的な偏りが認められる点である。「満州事変の頃」に生まれた世代以外について見れば，より上の世代が比較的多かった。一つ上の世代には，1920 年代生まれの鶴見俊輔（22 年），鶴見良行（26 年），いいだもも（26 年）らがおり，さらに上の世代としては，松田道雄（08 年），久野収（10 年），日高六郎（17 年），飯沼二郎（18 年）らがいる。これに対して，「満州事変の頃」に生まれた世代よりもひと世代下，つまり 30 年代後半から 40 年代前半にかけて生まれた世代は非常に少ない。この世代を飛び越えて，ベ平連が発足した当時の高校生・大学生の世代，つまり団塊の世代が数多く参加している。すなわち，東京のベ平連に関して言うならば，小田らの「満州事変の頃」に生まれた世代

（30年代前半生まれ）を中心とし，1910年代から20年代にかけての戦前・戦中派世代が加わり，運動の進展のなかで団塊の世代と言われた戦後世代が参入したとみることができよう。そして，60年安保前後に大学生活を送った小田らより一つ若い世代からの参加は比較的少なかったと言える。

この「満州事変の頃」に生まれた世代という世代認識は，実はかなり早い段階から小田によって意識されていたものだった。小田が高校在学中に執筆し出版した小説『明後日の手記』の後記のなかで「ぼくは，この小説によって或る一つの世代を描こうとした。主として満州事変当時に生れ，戦争と共に成長し，平和の到来をむしろ奇異の感情でむかえた，《奇妙》な世代[(8)]」と記しているのである。

この世代は，赤澤史朗が指摘しているように，安田武や橋川文三らのいわゆる「わだつみ世代」とは，異なる戦争体験とそれに起因する意識を有していた[(9)]。戦時中にすでに青年期を迎え戦争を経験した戦中派世代とは異なり，多感な少年少女期にもっぱら「銃後」での戦争を経験した世代なのである。同時にまた，戦争の経験がほとんど，もしくは全くない戦後派世代とも戦争経験の有無という点で決定的に異なっていた。この世代の特徴を三つ指摘しておくことにしよう。

第一は，空襲や飢えなど，戦時下の悲惨な体験を直に経験するとともに，小田が自らを皇国少年として育ったと述べているように，戦前の天皇制下での教育をまともに受けた世代であった。第二は，少年期から青年期にかけての最も多感な時期に，社会の価値観の大転換を経験した世代であった。第三にこの世代は，戦後の廃墟のなかのある種の自由で平等な雰囲気を肌で感じた世代でもあった。既存の権威が崩れ，また，敗戦による一億総貧乏状態ともいうべき状況下，人びとが自らが生きるために毎日を必死に生きた時代のなかで大人へと成長した世代なのである。これから検討するように，このような世代的な経験を思想化する試みが，べ平連に参加するまでにたどった小田の軌跡であった。

❷……「満州事変の頃」生まれた世代の戦争経験ー小松左京の場合

「『難死』の思想」は，「満州事変の頃」に生まれた小田自身の戦争体験をもとに書かれたものであったが，それは小田個人の特殊な経験だったというわけではなく，この世代に属する少なくない人びとに共有された体験でもあった。このことを確認するために，後にＳＦ作家として有名になる小松左京の例を取り上げてみよう。

東京のべ平連の中心メンバーというわけではなかったが，初期のべ平連の運動に積極的にかかわった作家の一人，小松左京もまた小田らと同世代の1931年生まれだった。戦争末期，神戸一中に在学していた小松は，西宮の自宅で父親と二人で暮らしていた（母親と弟，妹は京都の丹波に疎開，兄は名古屋大学に在学）。小松は，その頃の自らの生活を「授業は二週間に一回，五時間ぐらいお座なりにあるだけになって，勤労学徒動員生の工場に通うのが日課になっていた。神戸市の中山手にあった川崎重工の潜水艦工場である。電車は動いたり動かなかったりで不通の日には延々と三時間も歩いて通わなければならない。やせてしなびたサツマイモばかり食べているのでやせこけ，疲労と空腹でとげとげしい目つきの，汚らしい格好の少年の群れがとぼとぼと工場に向かうのだ[(10)]」と振り返っている。このような勤労動員の日々のなかで彼が経験したのは，空襲のなかでの無意味な労

働と生活であった。彼は次のように記している。

「私は旋盤工場で『罫描き』という作業を担当させられていた。潜水艦の部品の材料になる鋳物に，罫針と呼ぶ針で加工するための寸法を描くのだが，熱々の大きな鋳物はどんどん出来上がっても組み立て工場が空襲でやられて機能せず，加工できない鋳物は山のように積み重なって，空しさが込み上げてきた。工場で働いているさなか，緊急退避の命令が出て，山の中腹に慌てて逃れる。戻ると，工場の一切が瓦礫の塊になり，熱と煙を吐き出していた[11]」。

そして「空襲で焼けたままになっている家の遺体を片づけるアルバイトをしたこともある。戸板に乗せて，臨時の火葬場に運ぶのである。あの光景が今でも夢にでてくることがある[12]」という小松の記憶は，空襲後の多くの死を「無意味な死」と受けとめた小田の経験と相通じるものがあるだろう。

神戸にいた小松は，小田が戦争経験の軸においていた大阪大空襲を直接経験してはいないが，その記憶は次のように鮮明に残っていた。

「八月十四日，動員先の工場で働いていると空襲警報が鳴って慌てて避難した。大阪は砲兵工廠の辺りが爆撃でひどくやられ，大勢の人々が亡くなった，とあとで聞いた。B29 が工場の周りにも『伝単』と呼んでいたビラを落として悠々と帰って行った。『敵機のビラを拾うと憲兵に引っ張られる』と注意されていたので，地面の上のビラを棒で引っくり返して読んだ。正確な文面は忘れてしまったが，『日本の皆さん，天皇陛下はポツダム宣言を受諾しました。戦争は終わりました』という意味のことが書いてあった[13]」。

空襲に逃げまどう日々，直接目にする多くの死体，そして米軍機によるビラで知った敗戦の事実，これらはいずれも小田の「『難死』の思想」に描かれた戦争体験と同様のものであった。

こうした経験をもつ小松は初期のベ平連運動に積極的に参加した。たとえば，65 年 5 月 22 日に行われた日米同時デモの呼びかけ人に名を連ねており[14]，66 年から翌年にかけて行われたワシントン・ポストへの意見広告運動の呼びかけ人にもなっている[15]。自らの戦争体験とベ平連運動への参加とを小松がどのように結びつけて考えていたのか，66 年 8 月に開催された日米市民会議に出席した小松の参加記のなかの一部を紹介しておこう。

「同じような顔をして，同じような米をつくっている小さな国で，長年支配していたよそものをやっと追い出し，首相と称する血みどろのカトリック教徒をやっと始末したと思ったら，今度は，関係のない国の爆撃機が，爆弾やナパームや毒ガスや植物枯死剤をまきちらす。―その時，ふたたびあの記憶が，人々の胸にうずくような共感をもってよみがえってきたのであろう。空からふる火の雨に家をやかれ，肌を焼かれ，愛児を鉄片に貫かれ，丹誠こめた貧しい田をちりちりに枯らされて，硝煙の中をにげまどっているのは―私たち自身であり，私たちの肉親であり，私たちの恋人であった。あつい泥田の中をはいまわっている，私たちの両親であり，祖父母だった。私自身が，嘘でも誇張でもなく，北爆のはじまった頃から，十数年来見なかった空襲の夢を度度―はっきり記憶しているだけでも両三度―見るようになった[16]」。

小松のベトナム戦争に対する見方のなかにあるのは，日本が経験し，その中の一人として自らも経験した空襲の体験との二重写しの視点であった。この戦争体験の二重写しという視点は，初期のベ平連の運動を支える重要な視点だった。二重写しの視点は，「満州事変の頃」に生まれた世代に限られたものではなく，戦場に出ることなく「銃後」の生活を送っていた人びとに共有されうる視点

だったからである。たとえば，ニューヨーク・タイムズへの意見広告運動の際に寄せられた次のような便りのなかにも，こうした二重写しの視点を確認することができる。

「私達が受けた忘れ得ない爆撃の恐怖をベトナムの人達も受けて苦しんでいるのだと思うと，何とかせねばとあせります。一人の死によって起こる遺族の不幸という波紋の大きさと，いつまでもその波紋の消えて去らない事，アメリカはそれを知りませんのね[17]」。

さらに，ワシントン・ポストの意見広告に掲載された詩人・栗原貞子の文章も二重写しの視点に立ったものだと言えよう。

「私は広島の原爆で肉親と財産を失い，今も後遺症で苦しんでいます。一九四五年八月六日，広島は人間に対する最初の原爆実験場として使われました。そして今，ベトナムが同じようにアメリカの新兵器の実験場として使われていることを，私は八月六日の体験を通して実感しています。同じ運命をもつ人間同士として，爆撃にさらされているベトナムの人びとへの深い連帯の上に立って私は広島から世界に向って叫びます。『戦争をやめよ，ベトナムに平和を！』と[18]」。

こうした二重写しの視点は，戦後二〇年を経てもなお人びとのなかに残る戦争の記憶の重さを意味している。初期のベ平連の運動を支えたのはなによりもまず，戦争体験に基づく二重写しの視点だった。そして，二重写しの視点を思想的に展開したのが小田の「『難死』の思想」であった。

❸……「『難死』の思想」再考

「『難死』の思想」が発表されたのは雑誌『展望』65年1月号であった。ベ平連の発足はそれから4ヶ月後のことである。ここでは，小田の代表的な評論である「『難死』の思想」について，それまでの彼の思想形成をたどることを通して，なぜこの時期に彼が「『難死』の思想」を書くにいたったのかを跡づけることにしよう。

周知のとおり小田の思想形成の原点には大阪大空襲の体験があり，この体験を出発点として，自らの戦争体験をどのように考えるかということが常に小田の問題意識のなかで重要な位置を占めていた。彼にとって処女出版となった小説『明後日の手記』では，主人公の友人に空襲体験を語らせているが，その内容は明らかに小田自身の経験とかなりの部分で重なっている。ベ平連の発足以前の時期に小田はすでに『明後日の手記』を含め四冊の小説を出版しているが，そのうちの三冊（『明後日の手記』，『アメリカ』，『泥の世界』）で，主人公もしくは重要な登場人物に空襲体験を語らせており，空襲体験が小説のストーリー展開のなかで重要な位置を占めている。

フルブライト留学生としてのアメリカでの滞在とその後の世界貧乏旅行での見聞をもとに執筆された『何でも見てやろう』がベストセラーになり[19]，小田はあちこちにエッセイや評論を発表するようになるが，そこでもしばしば自らの戦争体験を記している。たとえば，『マドモアゼル』という雑誌の61年11月号に寄せた文では「飢餓。米はほとんど食ったことがなかった。大豆ばかりくって，そしてゲリばかりしてくらしていた。空襲。何度となく死にかけた。死に無関心になっていた[20]」と記し，同年の8月14日付『朝日新聞』には，「『難死』の思想」のプロットがほぼ出そろっていると言ってもよい次のような文章を掲載している。

「文字通りの大空襲だった。それまでふしぎに砲兵工廠はほとんど無傷だったのが，その日，午後

いっぱい続いた空襲のあとで，夕刻には，まったくのガレキの山に化し去ってしまっていた。

むろん，ガレキの山ばかりではない。そのあいだにころがっていた死体。私は翌日そこを訪れたのだが，死臭は鼻をついた。

この記憶は腹立たしい記憶だ。すでに日本の敗北が確定していたのに，何故，アメリカ空軍は空襲に出かけて来たのだろう。何故，あんなにもたくさんの人が死ななければならなかったのだろう。まったくの無意味の死―その空襲のさなか，私はビラを拾った。そこには明らかに，『戦争は終わった』とあった。私はそれを，防空ゴウのなかでふるえながら読んだ[21]」。

小熊英二によれば，空襲体験は小田の小説の方法論も規定したという。すなわち，「人間の愚劣さも，政治の非情さも，すべて描きだすことなくしては，大阪空襲で死んだ人びとを表現することは不可能だった」という認識が小田の全体小説への志向を生みだし，「空襲を行なったパイロットの視点からではなく，逃げまどいながら死んでいった人びとの視点から『何もかも』を表現するもの」「特定の中心をもたず，『多くの人間の複合的視野』から全体を構成する思想」がそこには込められていたという[22]。

いずれにせよ，小田の思想の基底部分に彼の戦争体験とりわけ空襲体験があったことは明白である。ここでは，空襲体験から出発した小田が，それをどのように思想化していったのかを，①アメリカ経験を通した「内」と「外」の視点，②世代経験，③時代の画期性と戦後の出発，という三つの観点から検討してみたい。

小田の空襲経験の思想化において重要な意味をもったのは，彼のアメリカ経験であった。小田を一躍有名にした『何でも見てやろう』には，彼が物怖じすることなく海外の社会に入っていき，そこで実際に目にしたこと感じたことが生き生きとした筆致で描かれている。日本はまだ海外渡航の自由化以前の時代であったこともあるが，20代半ばの青年がわずかな持ち金で世界中を旅する姿が人びとの関心を引きつけたと言えよう。

『何でも見てやろう』には様々なエピソードが盛り込まれているが，小田の戦争体験，空襲体験にまつわる話もしばしば登場する。ここでは二つのエピソードを取り上げておこう。

エピソードの一つは講演会での出来事である。アメリカの小説家パール・バックの講演を聞きに行った小田は次のような体験をしている。

パール・バックの講演は「原爆，水爆が人類の生存をおびやかしている今日，アメリカの芸術はこれではたしてよいのか？」という内容のものだった。講演会場で小田は立ち上がり，パール・バックに対して「原爆投下のことを知ったとき，あなたはそのとき何をしていたのか，またいったいそのとき何を感じたのか？という意味のことを訊ねた」。すると「聴衆のあいだにざわめきが起った。ただならぬ気配さえがし[ママ]た。司会者があわてて質問打ち切りを宣して話題を強引に転じるまでに，その気配はただならぬものがあった」のである[23]。

このように，アメリカでの小田は，戦争経験についての日米の差異について考え，様々な場所でこの問題についての問いを発し，両者の間に戦争の受け止め方についての大きな差異があることを痛感する場面にしばしば出くわした。日米の戦争に対する，とくに戦死者に対する断絶ともいうべき違いは，もう一つのエピソード，アメリカからヨーロッパに渡った時，パリでのアメリカ人女性との次のようなやり取りについての記述にも鮮明に記されている。

「パリをアメリカの女の子とぶらついていたとき，ある夕べ，私は凱旋門で予期しない光景に出会った。門の真下には無名戦士の墓があって，そこにはフランスがこれまでに参加した戦争の戦死者の霊が祀られているのだが，毎夕，ある種の儀式が行われていることになっている。その夕べ，私たちはそれに行き合ったのである。（中略）『なぜ，あなたは泣いたのであるか？』あとで彼女は当然の疑問を発した。『おれの国の戦死者たちのことを思い出したからだ』私は答えた。『アイ・シー』彼女は短く言い，『私にもその気持は判る。私たちはおたがいに戦ったのだから』とつけ加えた。

しかし，ほんとうのところは，彼女には私の気持が判らなかっただろう。私が泣いたのは，むくわれずして死んで行った同胞たちのことを，そのとき思い出したからだった。戦死者はフランスにもアメリカにもあった，というのなら，私はただ一つのことだけ言っておこう。彼らには，とにもかくにも，ナチズム，ファシズム打倒という目的があった。だが，私の同胞たちには，いったい何があったのか。彼らの死はまったくの犬死であり，彼らをその犬死に追いやった張本人の一人は，ついこの間まで，われらの『民主政府』の首相であり，口をぬぐって『民主主義』（彼らはたしかそれとの闘いのなかで殺されたのではなかったのか）と説いている[24]」。

以上のような小田の思考に見られるのは，戦勝国と戦敗国，攻撃する側と攻撃される側，武器をもつ者ともたざる者，大義名分が成り立つ戦争とそうでない戦争という異なる観点ないしは立場から見た戦争像をめぐる問いであった。それは単に対照的な二つの側面から戦争という事象を見るということに留まらず，そうした二項対立がその後の戦争の記憶化にどのように結びついているのかという点にまで及ぶのである。戦争体験のあり様の違いがその後の記憶の違いに結びつき，それが現在をどのように形作っているのかという小田の問題意識は，海外や日本の各地，そして当時は日本から分離され米軍支配下にあった沖縄など，様々な場所に実際に足を運び対話を重ねるなかでさらに研ぎ澄まされていく。

「『難死』の思想」に結びつく第二の観点は，世代認識である。小田は自らを「戦争のなかに生れ，戦争とともに育った[25]」と述べ，そうした立場から，戦争による死への過剰な意味づけ，否，一切の意味づけを拒否する。自分自身を含む「満州事変の頃」生まれた世代がいかなる特徴をもつ世代なのかという問題は，常に小田の問題関心の圏内にあった。「『難死』の思想」の「私は幼かったから，保田与重郎などいなかった。高坂正顕も高山岩男もいなかった。『総力戦理論』も『世界史の哲学』も『近代の超克』もなかった。『万葉集』の文庫本も『葉隠』も，いかにして死ぬかの考察もなかった。私の世界には，そのとき，そうしたものは何一つなかった[26]」という鮮烈な書き出しは，戦争期にすでに一定の判断とそれを支える知的蓄えをもっていた小田よりも上の世代に属する知識人に対する痛烈な批判なのであり，小田らの世代固有の戦争体験についての表現でもあった。

戦時期にあってはまだ少年であった小田の世代は，戦争を正当化したり自らを納得させる理屈やイデオロギーをもつには若すぎた。また，戦争を対象化し批判したり抵抗したりする理屈やイデオロギーをもち合わせていたわけでもない。そのことがかえって，「死」に対する覚めた目，突き放した姿勢を小田らの世代はもつことができたのである。

これまで述べてきた二つの観点は，小田にとっての戦争体験の意味づけと関連するものであった。もう一つの重要な観点は，そうした「満州事変の頃」に生まれた世代がもつ固有の戦争体験が，まさにそれゆえに戦後思想，戦後秩序の出発点を準備したという考えである。戦前と戦後を架橋する

思想を小田は模索していたのである。

小田らの世代は，戦争について観念やイデオロギーをもちえなかった世代であるとともに，戦後という時代の始まりを敗戦時の価値観の大転換を通して経験した世代でもあった。小田によれば，そのため，新憲法を含む戦後民主主義を思弁的にではなく一種の身体感覚レベルで吸収していったという。『世界』62年6月号に掲載された「『あたりまえ』意識のなかの憲法」で彼は，「根本的には，私は，『新憲法』がかたちづくる秩序，感覚」を，「すでに『新憲法発布』以前にもち始めていた。敗戦からそれまでに至る短かい時間のあいだに身につけ始めていた」と述べ，次のように続ける。

「『何を今さら』という気がした。天皇は人間であり，戦争は放棄すべきものであり，基本的人権はどんなことがあってもまもられるべきものであり，男女は平等であり……。それらは私にとって，すでに自明のこと，あたりまえのことであった。正直言うと，発布に至るまでの憲法論議をきくにつけ，私は思ったー『何をぐずぐずまだそんなことを問題にしているのか』そして，そう思ったのは，ふたたび言うが，私のみではなかったのである。たしかに，当時の日本にみなぎっていた新しい日本をつくり出そうという理想主義的な欲求は，政治より一歩先んじたところにいたのだろう[27]」。

このような身体感覚としての憲法を含む戦後民主主義の受容はなぜおきたのか。この点を戦争体験と結びつけて解くカギとして提示されたのが「公状況」と「私状況」というとらえ方であった。

「『難死』の思想」のキータームは，「公状況」と「私状況」である。「公状況」とは「公の大義名分」であり，それは「大東亜共栄圏の理想」や「天皇陛下のために」をさす。これに対して「私状況」とは「私の事情」であり，「言論の弾圧であり徴用であり餓えであり，戦場に駆り出されることで，究極的には死ぬこと[28]」である。戦況が悪化するなかで小田が見たのは，「公状況」と「私状況」との乖離であり，決定的だったのは，空襲のなかでみた死であった。彼は次のように述べる。

「私が見たのは無意味な死だった。その『公状況』のためには何の役にも立っていない，ただもう死にたくない死にたくないと逃げまわっているうちに黒焦げになってしまった，いわば，虫ケラどもの死であった[29]」。

このように述べる小田は，敗戦と戦後の出発においては，こうした「公状況」と「私状況」の間に完全な立場の逆転がおこったとし，そして「難死」を起点とする「私状況」による新たな「公状況」の再構築の時代を迎えたのだという。この点については次のように説明している。

「敗戦はその事情を逆転させる。その逆転は，『難死』の側に，それが完全な成功であると錯覚させるほどに完全な逆転であったのだろう。民主主義の『到来』は，『難死』を歴史の主役としたが，また同時に，社会，歴史に対して責任ある地位においた。ということは，戦争のイデオロギーの『公状況』が打ち倒されたあとで，新しい『公状況』を打ちたて，それと『私状況』との結びつきを考えなければならなかったということだったのだが，『難死』はそれを十分にやったとは言えなかった[30]」。

このように，小田の「『難死』の思想」は，戦争体験の思想化であるだけではなく，「難死」を体験した世代の戦後の出発点，戦後思想の原点であることを意味していた。戦後の始まりとともに価値観の大転換がおこり，しばしば指摘されるように，昨日までの軍国主義者が一夜明けると民主主義者に変貌を遂げるという珍しくない例が，小田らの若い世代にショックを与えた。そのことは，既存のあらゆる価値観をいったんは懐疑のフィルターを通して見ることにもつながる一方，「私状況」優先のなかで身体感覚として戦後民主主義の空気を吸ったことそれ自体が，日本社会を考え批

判する際に繰り返し立ち戻る引照基準にもなったのである。

こうした小田の「『難死』の思想」は，30年代前半に生まれた世代の戦争体験をバネに形成されたものであるが，その世代のみにしか共鳴をよばない，あるいは知識人の中でしか流通しない閉じた思想ではなく，世代を超え非エリートの人びとの意識にもつながるものであった。知識人ではない民衆の戦争体験記録を掘り起こして，それが戦後にどうつながったかを検討した吉見義明は，当時の人びとについて「未曽有の惨劇にみまわれた人びとは，その惨劇を繰り返さないために，戦争放棄と平和実現の意思を固めていた[31]」と指摘している。吉見の研究で取り上げられている人物の一人，三菱重工横浜造船所工員であった花村耕一（1926年生まれ）は，彼の戦争への見方を，当時出版され話題になった『きけわだつみのこえ』への違和感とともに次のように述べている。

「当時の気持ふつ〳〵とよみがへる。しかし，生へのあくがれにもえし人いかに多かりしかと感じる。たゞその様な人の遺作を集めし所に問題は有ると，自分は思ふ。余りにも軍国主義をのろふために，一方的に収録したとも解せられて？不幸にして，ほとんど同年令の人達で有り乍ら，学校に学ばぬ身にとって，単なる自己の周囲にのみしか知らざる身で有り，主議（ママ）も知らず，たゞ与へられた範囲での知識によって，この書に残せし人のごとくに国家，社会を広く見る事の出来ぬ自分だったので，たゞ〝死〟さへと思ってゐたその点に喰いちがいを生じたので一方的と解すのかも知れぬ。たゞ家へ帰りたい，死ぬ前に一度と，それ丈はこの人達と変らぬ意志を持ってゐた点にのみ断言出来る[32]」。

ここには，小田が指摘するような観念やイデオロギーではないレベルで戦争と死をとらえ，それをバネにして生を希求する見方が示されており，小田の「『難死』の思想」と通底する考え方を見て取ることができるだろう。

こうした民衆の意識を指摘する一方，吉見は，「対アジア侵略戦争の事実を踏まえて，平和を構想するという発想」は「ほとんどなかったことも事実[33]」と指摘しているが，この点は民衆ばかりではなく小田のような知識人にも見られることであり，小田の「加害」の論理の形成の問題と深くかかわっている。この点については後に改めて触れることにしよう。

❹……小田起用の背景（1）―小田・石原説の検証

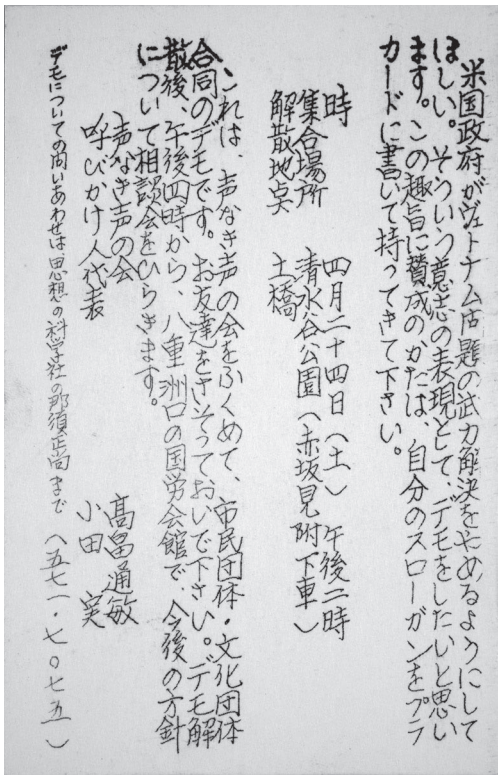
以上，「『難死』の思想」について，小田の思想形成過程のなかでやや詳細に検討してきたが，いずれにせよ「『難死』の思想」は，小田の代表的な評論であるとともに，日本人の戦争体験に新たな意味づけを行うものであった。道場が指摘するように，小田のこの評論が書かれたのは，ベ平連発足以前の時期だったが[34]，少なくとも小田の60年代半ばまでの言論活動をみる限り，すでに小田自身は，ベ平連かどうかはともかく，ベトナム反戦運動に主体的にかかわるだけの思想的なバックボーンは十分にできていたと言えるだろう。

この点に留意しながら，ここで，小田がベ平連の代表になる経緯について検討してみよう。これまでの研究では，あたかも全く白紙の状態で小田にとりあえず依頼してみたという説明がなされており，その延長線上で小田とともに石原慎太郎が有力な候補者として名前があがっていたとの説明もなされている。果たしてそうだったのだろうか。

まず，これまで通常なされてきた説明を整理しておこう。ベ平連の立ち上げと小田との関係は，高畠通敏と鶴見俊輔の話し合いのなかで，それまで運動にかかわりのなかった人物に依頼しようということになり，鶴見が小田に連絡をとったことに始まる。（図1）　鶴見は次のように回想している。

「六〇年安保のときに旗を振ったわけじゃない人を代表に頼もうということになって，それで小田さんに白羽の矢を立てて，私は正確に言えば二編会った程度で，付き合いはないんだけどね。電話をしたんだ。小田さんは大阪にいた。これこれのことやるから代表になってくれないかって。そしたら，電話一本で彼『うん』って言ったんだよ」[35]。

この鶴見の回想とほぼ同様の内容が小田の回想のなかでも語られている[36]。小田の場合，ベ平連発足後に鶴見らから聞いた話を基にしていると考えられる。鶴見の回想をみるかぎり，社会運動の未経験者という理由のみで小田に依頼をしたこと以外にはとくに説明もなされていない。回想を読む限り積極的に小田を推していたようには見えない。このような文脈のなかで，小田以外の候補者，そして小田以上に有力な候補者として石原の名前があがったという説明が登場する。


米国政府がベトナム問題の武力解決をやめるようにしてほしい。そういう意志の表現として，デモをしたいと思います。この趣旨に賛成のかたは，自分のスローガンをプラカードに書いて持ってきて下さい。

時　四月二十四日（土）午後二時
集合場所　清水谷公園（赤坂見附下車）
解散地点　土橋

これは，声なき声の会をふくめて，市民団体・文化団体共同のデモです。お友達をさそっておいで下さい。デモ解散後，午後四時から，八重洲口の国労会館で，今後の方針について相談会をひらきます。

声なき声の会
呼びかけ人代表
高畠通敏
小田実

デモについての問いあわせは思想の科学社の鄭須弥尚まで（五七一・七〇七五）

図1　ベ平連第1回目のデモを呼びかける葉書
高畠は声なき声の会の肩書き，小田は呼びかけ人代表という肩書になっている。
立教大学共生社会研究センター蔵

実際に，小田か石原かという選択肢が当時話題になったのだろうか。筆者は，その可能性はゼロとまでは言えないが，限りなくゼロに近かったと考える。その点を検討する前に，石原が有力な候補者だったとする小熊英二と竹内洋の説明を紹介しておこう。

小熊は「ベ平連結成時には，小田よりも，同世代の石原慎太郎を推す意見もあったという。当時の石原は，若者に人気のある行動派作家で，まだ右傾化しておらず，むしろ六〇年安保闘争で，同世代の大江健三郎や谷川俊太郎などと『若い日本の会』を結成して行動した経緯を評価されていた[37]」と述べている。この小熊の説明のなかで疑問なのは，鶴見と高畠が小田に依頼した唯一の理由が60年安保にかかわっていなかった点にあったにもかかわらず，石原に対しては60年安保への積極的なかかわりが評価されている点である。鶴見と高畠の人選においての重要な基準は60年安保にかかわっていない，あるいは社会運動にかかわっていないということではなかったのか。

小熊の説明以上に，石原が代表になった可能性についてより積極的に議論を展開しているのが竹内である。竹内は「小田と石原の名前は並列して挙がったというより，『小田というのはどうも新右翼ではないか，石原の方がいいんじゃないか』という見方が強かったほどだった[38]」と述べ，石原の方がむしろ有力であったとし，「ベ平連代表の打診があったら，石原は引き受けていたかどうか」という問いを立て，「いまとなってはあり得ないことだが，当時の石原ならその可能性はあった[39]」とい

う。石原が引き受けた可能性があったとする根拠として竹内が取り上げるのが，小熊の著書で紹介されている石原のエッセイ「君たちにも何か出来る」である。このエッセイは当時の慶応大学での学生運動に石原が理解を示すものであり，石原とベ平連関係者との立ち位置はそう遠くなかったと推察されている[40]。この竹内の議論についても，先ほどの小熊の説明について指摘したのと同様の疑問を投げかけることができる。つまり，そもそも社会運動の未経験者ということが小田起用の理由ではなかったのか。小田については社会運動の未経験，石原については社会運動の経験と関心，というダブルスタンダードが存在していたのだろうか。

また，竹内は石原が学生運動を積極的に支持していたことを理由に，仮に代表就任の依頼があれば石原は引き受けていた可能性があったと述べているが，この点も疑問である。当時の石原が社会の権威に反発する学生運動に一定の共感をもっていたのかもしれない。しかし，ベ平連の運動は反戦運動・平和運動だったという基本的な事実が見落とされているのではないか。たとえば佐野洋による石原の伝記によれば，当時の石原は「戦争体験などというものにいつまでも拘泥しているのは回顧趣味であり女々しい，それよりもこの現実の過酷さを正視することの方が重要だ[41]」と考えていたという。「『難死』の思想」の執筆に至るまで持続的に戦争経験の意味を問い続けていた小田とは対照的な地点に立っていたのが石原だったのである。

このように，小熊や竹内の石原をめぐる説明は必ずしも説得的ではないように思われる。ここまで両者の説明の中身に即して疑問を述べてきたが，石原が有力候補だったとする二人の議論の出発点そのものに問題が孕まれているのではないのだろうか。

実は二人がともに依拠しているのは，『諸君！』1973年4月号に掲載された「ベ平連に何が起っているか」というレポートである。このレポートの筆者は上之郷利昭という人物であり，当時は東京新聞特報部記者であった。このレポートのなかで上之郷は次のように記している。

「ベ平連が創設されるとき，看板になる男が必要だというのであれこれあげつらったところ，小田実氏とともに石原慎太郎氏の名前が上がった。しかも，『小田というのはどうも新右翼ではないか，石原の方がいいんじゃないか』という見方が強かった，というエピソードはベ平連発足当時の事情を物語っていて面白い[42]」。

上之郷は，このエピソードをどこから聞いてきたものなのか記していないし，出典も記されていない。ベ平連関係者が記した様々な記録類を見ても石原という名前は出てこない。管見の限り，ベ平連関係者の記録のなかで，この問題に関連するであろう石原関係の記述は吉川勇一によるもののみである。吉川は，ベ平連についての彼の回想をまとめた『市民運動の宿題』のなかで，小田の『何でも見てやろう』の読後感として「これはひょっとすると日本のネオナショナリズムのリーダーになりかねぬ人物かも知れない，というものだった」と述べ，「それに対し，六〇年安保闘争の中で『若い日本の会』をつくったりした『太陽の季節』の石原慎太郎の方にむしろ期待をもっていた」と記している[43]。上之郷の上記レポートを読むと，上之郷はベ平連取材においてかなり吉川からの情報に依拠している。ベ平連代表候補として小田と石原の名前があがったというエピソードは，吉川を取材するなかで上之郷のなかで情報が錯綜した結果つくりあげられた可能性が高いように思われる。すなわち，共産党の活動家として平和運動に携わっていた吉川は，当時ベストセラーになった小田の『何でも見てやろう』を読み，新手のナショナリストではないかと受け止め，一方六〇年安保に

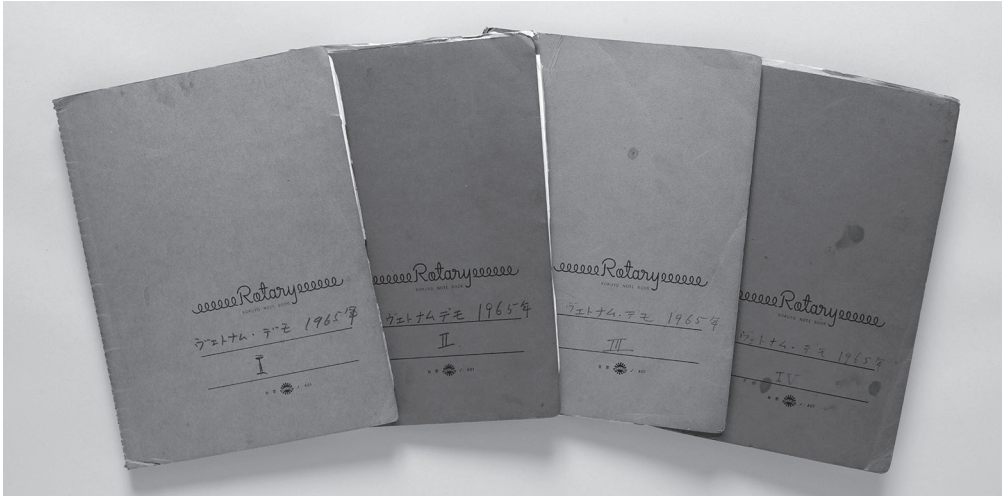


図2 「ヴェトナム・デモ　1965年」ノート　Ⅰ～Ⅳ
ベ平連の立ち上げから徹夜ティーチインまでの鶴見俊輔による打ち合わせメモ等が記載されている。立教大学共生社会研究センター蔵

おける石原の行動を見て一定の期待感をもっていた。これは吉川の回想通りなのだろう。新聞記者としてベ平連の取材をしていた上之郷は，当時東京のベ平連の事務局長をしていた吉川から様々な話を聞き，そのなかで，ベ平連以前の小田に対する吉川のイメージを聞き，それがベ平連誕生時の話に結びついてしまったのではないか。しかし，周知のとおり吉川はベ平連の立ち上げには全くかかわっていなかったのである。

もちろん，吉川の情報が上之郷によりデフォルメされ生み出されたのではないかというのも筆者の推測の域を出るものではない。しかし，石原が候補者と考えられる可能性が極めて低かったことを示唆する資料が存在する。立教大学共生社会研究センターが所蔵し，2017年の国立歴史民俗博物館で開催された「1968年展」でも展示された『ヴェトナム・デモ』ノートである。（図2）

鶴見俊輔が残した『ヴェトナム・デモ』と表紙に記されたノート4冊には，ベ平連の立ち上げから65年8月に行われた徹夜ティーチインにかけてのメモ書きが残されている。このノートに記されている記述に依拠して，ベ平連立ち上げの経緯を整理してみることにしよう。

まず3月27日に文春画廊で開催中の富士正晴個展の会場で高畠と鶴見が会い，高畠から「ベトナムについてのデモを，声なき声で呼びかけておこしたいが，事務連絡責任者が見つからない，現在の自分にはムリだという相談」を受ける。29日に鶴見俊輔と良行が相談し，その際，都留重人から「しずかなデモのプラン，新聞広告のプラン」というアイデアが寄せられている。翌30日に『中井正一全集』の集まりがあり，「久野収の意見で安保の際のリーダーより若い層で，新しい指導部をつくる案」が示される。31日，鶴見俊輔と高畠が再び会い，4月3日に打合せ会，24日にデモの予定で連絡を開始することにした。そしてメモによると4月1日に「スポークスマンは小田実」という記載があり，2日に「小田実，スポークスマンになることを承知」とある。(44)

以上のメモを踏まえると，3月27日の鶴見と高畠の話し合いの際に小田の名前が出たのかどうかは微妙である。これまでは，最初の鶴見と高畠の話し合いの後すぐに鶴見が小田に電話をかけたかのように思われていたが，実際に鶴見が小田に電話をかけたのは，4月1日ないしは2日である。30

日の『中井正一全集』の集まりでの久野の発言を受け，翌31日の鶴見と高畠の二度目の相談の際に小田に声をかけてみることとなり，鶴見が小田に電話をして承諾を得たという経緯ではなかったかと考えられる。このような推測が成り立つのは，鶴見から小田への連絡は一度だけであり，そこで小田が即答するかたちで参加を承諾したというのは動かしがたい事実だと考えられるからである。

こうした経緯を見ると，小田をスポークスマンにというアイデアは久野のアイデアだった可能性も否定できない。実は，この時期，小田と久野の接点がなかったわけではない。久野が編集した（そして3月30日に出版記念の集まりが催された）『中井正一全集』第2巻の別冊の付録に小田が小文を寄稿しているのである[45]。この点については，小熊も針生一郎の回想を引き，小田の起用が久野の発案だった可能性に触れてはいるが[46]，注記で「久野が鶴見らと連絡があってこうした提起をしたのかは不明」としている[47]。だが，『中井正一全集』出版の集まりの後に鶴見が小田に電話をかけていること，そしてノートに久野の発言が記されていることから，久野の影響があった可能性は非常に高かったように思われる。

一方，『ヴェトナム・ノート』のなかには石原の名前は全く登場していない。もし，小田よりもむしろ石原を推す声の方が強かったとするならば，石原の名前が一度は登場してもよいはずである。さらに言えば，4月6日の時点で「呼びかけ人試案」が作成されているが，そこには開高健や高橋和巳，小松左京などの作家の名前も確認できるものの石原の名前はない。

以上のことから，小田とともに，あるいは小田以上の有力な代表候補者として石原の名前があがったというエピソードは，後にできあがった作り話だった可能性が高いと言ってよいだろう。

❺……小田起用の背景（2）―小田の言論活動とその周辺

では，なぜ小田だったのだろうか。もちろん，高畠と鶴見にとって，当時の小田は未知数の存在だったことも事実だろう。久野の発案の影響はかなりあったと思われるが，最初に小田に依頼したのには，それなりの背景があったように思われる。この問題を，小田のサイドから考察してみることにしよう。

当時の小田が「右」に位置する人物と見られていたという点について，小田の幼馴染の米谷ふみ子が小田から次のように話を聞いたという。

「僕はなあ。アメリカから帰ってきた頃は日本の社会が左に傾いていたから皆僕のことを右翼やと呼んどったんや。それが僕は全然変わってへんのに，今は社会が右に傾いてるやろ。僕のことを左翼と呼んどるわ。あはは[48]」。

たしかに小田は左翼ではなかったものの，右翼とまで見られていたかどうかは微妙である。小田は60年安保には参加しておらず，その後も社会運動にかかわった経験はなかった。しかし，彼の代表的な評論であり，ベ平連の思想的な核の一つとなった「『難死』の思想」が発表されたのは，『展望』1965年1月号である。雑誌の発売は12月であるから，高畠と鶴見が話し合う数ヶ月前に発表されていたことになる。当時の『展望』は代表的な評論雑誌の一つであったので，鶴見，高畠のどちらも目を通していないとは考えにくい。すでに論じたように，小田は「『難死』の思想」に至るまでの時期，様々な場所で戦争経験の問題をはじめとして社会的な発言を行っていたのである。

少なくとも鶴見や高畠の周辺において，小田の言論はある程度注目を浴びるようになっていたように思われる。たとえば，『ヴェトナム・デモ』ノートのなかで初期の段階で鶴見に対して新しい運動のアイデアを提示した都留重人は，小田に注目していた知識人の一人であった。当時都留は，『朝日新聞』で論壇時評を担当していたが，小田の評論「アメリカの作ったもう一つの日本」（『中央公論』）について「小田はここで，現代日本社会の『繁栄』の一側面を，たくみにえぐりだしている」，「日本に二つの『日本』がある。そこに挙げられている驚くべき事例を，私などは初耳であったという事実こそ『もう一つの日本』の存在を実証することになるのかもしれない」と述べている。(49)

さらに65年2月の論壇時評では，小田の「沖縄の中のアメリカ」（『中央公論』）を取り上げ，「あらためて多くのことを考えさせられる」，「小田は，気どらぬ普通人の良識で，いろんな人に会い，いろんな所を見，ぶしつけともいわれそうな質問もし，小さなことの中にも小田特有の観察眼をはたらかせ，生き生きとしたルポルタージュを書いた」と評価し，(50) さらに「『難死』の思想」についても，「『私状況』と『公状況』とを区別し，『私』を『公』に埋没させないよう，『私』をどこまでも『私』として確立させようと説いているが，堀田の『我慢論』と一脈通じるものがあって，興味深い」と論評している。(51) このように都留の論壇時評での小田の取り上げ方は，いずれも好意的なものであった。

また，人脈の点から言えば，小田の場合，高畠はともかく鶴見とは比較的近い場所にいたように思われる。小田は高校在学中の1951年に最初の小説『明後日の手記』を河出書房から出版しているが，このデビュー作には桑原武夫による序文が添えられている。桑原は「旧文壇的基準にてらして不手際を指摘するのはむしろ容易だろうが，作者は恐らく，そのような基準を無視して，外国文学ならびに中村真一郎氏，椎名麟三氏らの影響の下に数年来丸山薫氏の指導の下に作詩した経験を生かしつつ，いきなり大胆にフィクションによる自己主張を試みたのであろう。その冒険は評価されるべきであり，一つの新しい方向をひらいたとさえいえよう」(52)と小田への期待をこめた文章を寄せているのである。

高校時代の小田は桑原とかなり親しい関係にあったようである。たとえば，両者の関係を物語るエピソードを作家の安岡章太郎が次のように記している。

「高校生の時分に小田は京大教授の桑原武夫氏のところへ遊びに行き，東大と京大とどっちへ入ったらいいだろう，と相談を持ちかけたという。桑原教授は，ずうずうしいとも人を食ったとも言いようのない質問にアキれながら，

『そりや，どっちも好え学校やけど，入学試験いうもんがあることを忘れンようにな』

とこたえたところ，小田は落ち着きはらって，

『それやったら，べつに心配ないと思います』

と返答した由」(53)。

桑原は当時京都大学人文研究所教授であったが，鶴見俊輔は桑原に呼ばれるかたちで京都大学に就職し，(54) 1949年から5年間，人文研究所に籍があった。ちょうどその時期，高校生の小田が桑原の研究室に出入りしていたのである。

また，『何でも見てやろう』以後の言論活動により，小田は徐々に当時のリベラルの立場に立つ知識人とのつながりを深めていった。たとえば，1963年には竹内好が主催する中国の会の雑誌『中

国』第6号に小文を寄せており，さらに，すでに指摘したように1964年に久野収編で出版された『中井正一全集』にも小文を寄せている。したがって，小田の人間関係から見ても言論活動から見ても，65年段階でベ平連の代表を小田に依頼するということは，それほど意外なことではなかったのではなかろうか。

とはいえ，鶴見の回想のなかでは，ベ平連以前の小田については素っ気ない印象を受ける。実際，その頃の鶴見は小田を必ずしも高くは評価していなかった。そのことは，ベ平連発足以前に行われた二人の対談に示されている。対談は小田が出版した『日本の知識人』をめぐって行われており，鶴見はこの本について「留学三代記みたいなもの，これはたいへんおもしろいと思いましたね[55]」と評価する一方，「ここで落ちているのは，外国に行かない知識人なんですよね。にもかかわらず，結論はね，外国に行かない日本の知識人についての結論を出しているわけなんだ。（中略）そこのところが，論証の手続としてまずい[56]」と問題点を指摘している。その後，日本の知識人のあり方，若者論，ナショナリズム論や今後の日本社会の展望などをめぐり議論がなされているが，議論がうまくかみ合わず平行線をたどっている。最後に小田が「個人と社会との中で，どこまで自分を守るかという点に，倫理がかかってくるわけでしょう。（中略）一つ一つの状況に応じて変わる場合に，どっか一つのきめ手がないといけないと思う。ぼくの場合だったら，それはリベラリズムだと思うし，リベラリズムを非常に戦闘的なものとして考えたい。そういうものを自分の倫理の基調にしたいとぼくは思うんです[57]」と自らの政治的な立ち位置を述べているが，鶴見は特段の反応を示していない。

このように見てくると，当時の鶴見や高畠の周辺にいたリベラルの立場に立つ知識人・文化人のなかで小田の存在は徐々に注目されるようになっていたが，鶴見自身はこの時点ではさほど小田の思想を高く評価しているわけでもなかった，と言うことができるだろう。しかし，60年安保の経験からは自由であり，なおかつ反戦平和運動に理解を示し，リベラルな潮流に近いと思われる小田に代表を依頼することについて，鶴見には抵抗感もなかったのであろう。

❻……小田にとってのベ平連

ベ平連の代表への小田起用の背景について検討を加えてきたが，鶴見の電話に対して小田が即答で承諾したのはなぜなのだろうか。この点について検討を加えておくことにしよう。従来もっぱら鶴見や高畠らの依頼する側からの説明がなされてきたが，即答で承諾した小田の側の事情についてはあまり考慮されてこなかったからである。

小田がベ平連代表を引き受けた理由について，かなり大胆な仮説を提示したのが竹内洋である。竹内は，ベ平連時代の小田は長期の躁状態にあったのではないかと指摘し「初期の自己批判とユーモアに溢れた柔軟な小田と，後半期の陰鬱で硬直した小田の大きな落差[58]」があったという。竹内は『なんでも見てやろう』出版以前の小田についての河出書房の編集者の坂本一亀らの回想を引用して，「陰鬱で不機嫌な晩期の小田実は，高校生から大学生の小田の隠伏したパーソナリティの再現ではなかったろうか[59]」，「小田は，その生涯で鬱状態（高校時代から大学生まで）から躁状態（留学時代から初期ベ平連まで），そして鬱状態（後期ベ平連以後）へと周期を描いて駆け巡ったということになる[60]」としている[61]。ベ平連への参加とその後の活躍は，長期の躁状態にあったがゆえに可能と

なったというのである。しかし，小田の精神状態による説明には果たしてどこまで説得力があるのだろうか。そもそも青年期の小田は竹内の指摘するような陰鬱で神経質な青年だったのだろうか。

高校時代に出版した最初の小説『明後日の手記』以来，小田の作品の編集にあたっていた坂本一亀についての伝記は，「坂本一亀が抑圧から解き放たれて，楽しそうに接していた相手の一人を挙げるとしたら，それは小田実であるだろう[62]」，「ざっくばらんで，言いたいことを忌憚なくしゃべる小田実を，坂本一亀はとても愛していたのではないかと思う。いつも気むずかしい顔をしていた坂本一亀は，小田実が現れると，子供のように邪気のない，人懐っこい可愛い笑顔を見せたのが印象に残っている[63]」と述べている。このように，少なくとも坂本の伝記に登場する小田の人物像は暗く陰鬱な青年ではない。

小田の古くからの知人であった真継伸彦の例を見てみよう。真継は『小田実全仕事 1』(1970 年)の解説のなかで「はじめて会ったのはたしか昭和三十一年の初頭で，場所は世田谷区三軒茶屋のさる喫茶店[64]」での小田の様子を次のように記している。

「私は小田と最初からうまが合った。小田の人をもてなすたくみな饒舌とあけっぴろげな性格は，だれをも初対面から友人にしてしまうのだが，それだけではない。私は長身痩躯の彼が暗く鋭い目をかがやかせて熱烈に語る文学理念，すなわち全体小説論にもとから共鳴していたのである[65]」。

真継が小田と初めて会った 1956 年は，小田がアメリカに留学する前の時期であり，竹内によれば長期の鬱状態にあった時期にあたる。しかし「人をもてなすたくみな饒舌」，「あけっぴろげな性格」が当時の小田の特徴だったのである[66]。

小田の性格については，彼を知る様々な人々の様々な言及があるが，竹内のように，ある時期には躁状態，ある時期には鬱状態として時間軸でみるのではなく，元々小田には豪放磊落な面と神経質な面が同居しており，局面に応じてそのどちらかがより強くでたと考えた方が自然ではなかろうか。小田の性格の二面性について，小田に誘われてベ平連に参加し，初期のベ平連運動の牽引者の一人であった開高健のエッセイが巧みに描写している。

「たしか彼が放浪記を出版して間もない頃だった。それまでまったく面識がなかったので，ある日，新宿の喫茶店で初のお手合わせを試みることとなった。

約束の時刻に約束の場所へいってみると，写真のとおりの大きな男がよれよれのレインコートを着て，猫背，もじゃもじゃ髪であらわれた。ひどくせかせかした口調で，待ったか，わア，すまん，すまんといった。

ジュースを飲みながら，まず御挨拶にと思って，タバコをさしだしてみたら彼は手をふった。いきなり大きな声で，

『タバコは吸えへんねん。オレはそんな非本質的なもンとかかわりあえへんねん』

そういったあと，とつぜん発作的にケッ，ケッ，ケッと笑った。大げさなことをいう男だと思ったが，何となくその笑声を聞くと，これはかなりな躁鬱症だとも思わせられた。自分が日頃から苦しめられているから，つい，人にもおなじものの影を読んでしまうのかも知れないが…[67]」。

このように小田は一方で豪放磊落，しかし一方では極めて繊細でナイーブな部分をもっていた人物であったように思われる。いずれにせよ，小田の精神状態からベ平連との関係を説明するのではなく，小田の政治や社会，そして戦争そのものに対する思想形成から説明する必要があるだろう。

先に取り上げた鶴見との対談のなかで，小田が「リベラリズムを非常に戦闘的なものとして考えたい。そういうものを自分の倫理の基調にしたい[68]」と述べているように,『何でも見てやろう』以後の小田は戦闘的リベラリズムへの志向性を強めていた。

こうしたリベラルへの共感は，当時の論壇に対する小田の次のような評価のなかにも端的に示されている。

「日高六郎氏の『歴史の役割と理性の立場』（『展望』）は，まさに『あたりまえ』のこと，原理的に『あたりまえ』のことを，人を説得できる口調と論理をもって述べていた。この文章の趣旨を一口で言えば，現実追随の現実主義（私自身はほんとうの現実主義とは考えない）に対して，戦後民主主義と平和主義の積極的価値を考えなおそうということであろう。同じ文脈のなかで読まれるべきものとして，同じ『展望』の，私は深く同感したが，本多秋五氏の『戦後文学史論』がある。あるいはまた，松田道雄氏の『一市民のマルクス主義体験』（『展望』），加藤周一氏の『十年の道の半ばで』（『世界』）戦後このかたの思想状況を手ぎわよく説明してくれる座談会『革新思想の問題状況』（『現代の理論』）も，そこから出発してよむことができる[69]」。

こうしたリベラルへの共感に加え,小田がベ平連に積極的に参加する決定的な動機となったのは，沖縄での経験だった。小田が沖縄を訪れたのは，1964年の暮れから65年初めにかけてである。そこで小田は在沖米軍関係者や瀬長亀次郎らと面談している。沖縄を支配する米軍について小田は，「ワトソン氏に欠けているものは，ワトソン氏のみならずたいていのアメリカ人に欠けているものは，たとえば『日本が共産主義化しようがしまいが，それは日本人自身の問題であって，アメリカ人にはとやかく言う権利も義務もない。』という観点だろう。私はまずその第一原則をはっきり樹立したうえで，あらためてアメリカとの関係を考えることが日米関係においてもっとも重要なことだと考える[70]」と述べ，歪んだ日米関係の現実とそこからの脱却の必要性を指摘する。そして「『リューキューアン』をふくめて日本人は，たえず，自分の権利を主張して行かなければならない。その努力をおこたるとき，沖縄の返還が日本の核武装を許容する新しい安保条約締結と交換する形で行われるというおそるべき事態が起るかも知れない。1970年をあと五年に控えて，私たちは安保条約の廃案と沖縄の返還をいかに実現するかを具体的に考えるときに，いま来ているのである[71]」というように，日米安保条約を前提とする沖縄返還の危険性を指摘し，安保廃棄と結びついた沖縄返還の必要性という認識を示している。

小田にとって沖縄での見聞がどれほど重要だったかについては，ベ平連発足後，『文藝』65年10月号に掲載された，カール・オグルズビー，北小路敏との座談会のなかで小田自身が語っている。

小田は,「作家というよりも，僕は一人の日本人としての問題として，ヴェトナム問題にたいへん関心を払って，なにかやらなければならないと思ったのは，沖縄に行ったときです」と，沖縄旅行の経験がベトナム反戦運動にかかわる引き金になったことを明らかにしている。彼は沖縄で「僕自身も沖縄に行って沖縄に日本国憲法が適用されないということを知らなかった。なんとなく日本国憲法が適用されると思っていて，これは高等弁務官にはっきりと聞いたのですが，日本国憲法というものは，平和憲法だけれども，その憲法は適用されないという確信を得た」とし,「沖縄からこのあいだのようにB29が飛んでいってヴェトナムを爆撃する。もしそれが返ってきたら戦争状態になるわけです。沖縄との間はそうするとどうなるかというと，沖縄の人たちは動員される。ところが

沖縄の人たちは片方で日本人であると明言している。安保条約体制の下にないから自然に巻き込まれる。しかも沖縄は日本の一部である。そうすると条理上からいうと日本も巻き込まれる」，「だから，そういうことを考えていくと，ヴェトナムの問題というものは対岸の火事じゃなくて，実はわれわれの問題であるということが，非常にはっきりとしてくる」と述べている。[72] 沖縄を媒介にしてベトナム戦争を自らの問題と捉えるようになったのである。

沖縄の問題が小田にとっていかに重要であったかは，65年9月にアメリカのミシガン大学で行われたティーチインに参加した際に，アメリカの聴衆に対して小田が語ったことも沖縄の問題だったことにも示されている。[73] そして，上に引用した対談での小田の発言からも分かるように，沖縄での見聞を通じて小田はベトナム戦争を「対岸の火事」ではないと認識するようになった。沖縄の問題は「日本も巻き込まれる」問題であるのみならず，戦後平和思想に対して小田が大きく貢献したと言われる「加害」の論理にもかかわる問題でもあった。小田の「加害」の論理はどのようなプロセスを経て形成されていったのか。最後にベ平連発足の前と後の時期における「加害の論理」についての小田の考え方の変化を検討することにしたい。

❼……「加害」の論理の形成

まず小田の加害者論についての代表的な研究である小熊英二と道場親信の説明から見ておくことにしよう。二人の見解が，小田の加害者論についての最も一般的な理解であると考えるからである。

まず小熊の場合であるが，彼は「日本がベトナム戦争において，加害者であると同時に被害者であることは，1966年に，第15章で述べるベ平連代表の小田実が言いだしたものだった。この年にベ平連はアメリカの反戦活動家を招いて『日米市民会議』を開いたさい，小田は『日本はアメリカに対して被害者の立場に立っている。しかし同時に，そのことによってベトナムに対しては加害者の立場に立っている』と主張した」[74]と述べ，66年の日米市民会議において登場した考え方であったと指摘している。この時期に加害者論が提起された理由として，戦争を知らない若者との接触の経験から「被害者意識に根差した平和運動はもはや限界であり，加害者意識の覚醒を訴えることで，戦争を知らない若者たちに届く言葉を創造しようとしたのである」[75]と述べている。そして，小田のこの主張は，「小田の「被害者＝加害者」論は，戦後の民主教育をうけた世代に，つよいインパクトを与えた」[76]という。

もちろん，小熊が指摘するように，小田が考えた「加害の論理」は，それを支持した若者らの考えとは必ずしも一致するものではなかった。すなわち「小田が一九六六年に『加害者体験』を強調したときには，『加害』の自覚と『被害』の記憶は対立するものとはされていなかった。小田は国家の命令で徴兵された兵士たちを，国家の被害者であると同時に加害者である存在，被害者であることによって加害者の位置に追いこまれた存在として位置づけていた」のであり「小田が『加害』の自覚を強調したのは，被害と加害の不可分性を強調することで，現在の自分をも支配している社会構造を認識させるためだった。そして戦争体験者の悔恨は，多くの場合，自分の勇気の不足から若者を死なせてしまったとか，自分自身の侵略行為に手を染めさせられたといった，『加害』に対する後悔から生まれていた。そうした『加害』の記憶をよみがえらせれば，『被害』に偏重した感傷に固

定化しつつある戦争体験の衝撃力を，もういちど再生することができるはずだった」のである。[77]

道場もまた小熊と同様66年の日米市民会議以降加害の論理が登場したことを指摘し，小田が加害者の論理をとるに至ったのはベトナム戦争にあったとする。すなわち「小田自身が『被害者』的平和主義の限界を痛感し，『加害者』としての自分たちの立場を理解したのは，ほかならぬベトナム戦争の経験であった」[78]のであり，より具体的な契機としては日米安保の問題があったとして次のように説明している。

「『加害者』性への気づきをもたらしたのは，安保条約の存在であった。安保条約が日本をベトナムに対する『加害者』としていること，その加害を構造化しているのが安保条約であること，加害の構造から離脱するためにはただの『被害者』論ではだめだということ，離脱するためには国家の加害性に対峙する『個人』の原理を立てる必要があること，それらへの気づきから戦争体験のつかみ直しが生じていった」[79]。

二人の説明に共通するのは，加害の論理はベ平連に参加して以降，とくに66年の日米市民会議で登場したこと，その契機になったのは小熊の場合は若い世代との相互理解のためであり，道場の場合は日米安保についての認識が指摘されている。確かに小熊の言うように，予備校の講師をしていた小田は日頃から若者と接する機会が多く，エッセイでもしばしば若者論を記すなど，若い世代との相互理解はいかにして可能なのか，常に考えていた。また，小田が日米安保条約に関心をもち，その廃棄も視野に入れていたことは，先に説明した沖縄での見聞をもとにした彼のエッセイのなかにも記されている。ただし，二人が小田の加害者論の発想の背景として指摘している点は，ベ平連に参加する以前から，小田の問題関心の枠内にあったことであり，なぜ66年の段階で「加害」の論理が登場したのかという点について，必ずしも説得的な説明にはなっていない。そして，実は，小熊も指摘しているように，ベ平連の参加以前に，小田は戦争における加害の問題について，かなり深刻に受け止め考えざるをえない経験をしているのである。

それは小田が1962年に出版した小説『アメリカ』をめぐる問題であった。この小説に対する書評で「この小説の欠点は日本人が最大の加害者である中国人が登場しないことだ」との指摘を受け，小田自身もそのことを認めている。当初はこの小説のなかで中国人も登場させようと考えていた彼は「その企てを放棄した」として，その理由を次のように述べている。

「なぜか。私の視点が定まらないのだった。率直に言って，どのようなところに自分が立って，中国人を描いて行ったらよいか，判らなかったのである」[80]。

このように述べる小田は，自身の戦争認識はアメリカ体験を通して深められていったのであるが，「アメリカ人と戦争の話をするとき，私はむしろ気らくだった」，「アメリカが加害者であり日本は被害者であるという意識にもたれかかって，私はときには相手をネチネチとヤリこめることだってできた」[81]のであるが，対アジアにおいてはそうはならないことを，彼がアメリカで知り合った台湾からの留学生（子供時代は南京にいた）との思い出に触れて，次のように述べている。

「私の書きたいのは，そのときに私が感じた気持についてである。いや，『感じた』のではない，何も『感じなかった』と言ったほうがよいかも知れない。もう少し私より上の世代の人間なら，そうした瞬間，罪の意識に激しく責めさいなまれたのにちがいない。しかし，私はそうではなかったのだ。どう言えばいいか，実感がおこって来ないのだ。それは，私の朝鮮人の友人が彼らの祖国を

かってにむちゃくちゃに踏みにじった日本を激しく攻撃するときに，私が感じたもの，いや，感じなかったものというのに似ていた。そんなとき，私は彼らの攻撃をまったく正当なものと認めながら，それでいて，おれはその日本となんの関係もない，おれはまだそのときほんの子供だったのだ，と考えているのだった[82]」。

ここで小田が述べているのは，実体験がない人間にとって「加害」の問題を捉えることの困難さであろう。もちろん，小田自身が，「逃げ口上」といっているように，これをよしとしていたわけではないが，小田にとっては極めて重い問題であった。

この問題が容易に解決のつく問題でなかったことは，「『難死』の思想」においても，「加害」の問題には言及されなかったことからも明らかである。「『難死』の思想」におけるこの問題点を鋭く指摘した道場の説明を引用しておこう。

「この論文で行われたことは，戦争体験の『被害者』論としての掘り下げである。つまり，人びとが『戦争の被害者』というときの，その意味を論理化したのである。『難死』の概念は，崇高さを賦与することも不可能な『虫ケラ』のような死，まったくの『犬死』として戦争死をとらえるものであり，その『難死』を強いた国家の暴力と責任を問うものであった。だが，この時点では『被害者』論の深まりはあっても『加害者』論はなかった。ということは『アジア』の他者は論議の中に登場しなかった，ということでもある[83]」。

道場の指摘の通り「『アジア』の他者は論議の中に登場しなかった」のであるが，先に述べたように小田の問題関心に「『アジア』の他者」が存在しなかったわけではない。しかし，小説『アメリカ』に対して寄せられた批判について小田なりの回答はまだ見いだせないでいたと言えるだろう。「『難死』の思想」の段階では，小田は「加害」の問題の重要性を認識しながらも「加害」の問題についてまだ書くことができなかったのである。

たしかに，小熊や道場が指摘しているように，小田が「加害」の論理を明確に示すようになったのは66年夏の日米市民会議以降のことである。しかし，小田が「加害」の論理を展開するきっかけとなったのは，「『難死』の思想」執筆後の時期にあたる64年暮れから65年初頭にかけての沖縄旅行であった。小田が「加害」の論理を明確に展開した「平和の倫理と論理」のなかに次のような一節があるのである。

「沖縄で，米軍撮影の上陸作戦の映画を見たことがあった。大砲をうつ場面があり，家が吹きとび，森が燃える―私は何気なく見ていて，ああ，こんな映画なら過去にいくらでも見たという意識がどこかに流れていて，そして，ふいに気がついた。その吹きとぶ家のなかにいるのが私の同胞の日本人であって，中国人でないことを―私はそれまですべてを加害者の眼で，見ていたのではないか。いや，きっとそうなのだろう[84]」。

このようにベ平連に参加する少し前の段階で，小田は「加害」の論理に接近する視点を獲得しつつあったのである。しかし，この視点がさらに練り上げられていくうえで重要な機会があった。1966年6月に行われた全国縦断講演旅行である。（図3）

この講演旅行は，小田の発案で取り組まれたものであり，アメリカから歴史学者のハワード・ジン，学生活動家のラルフ・フェザーストンの二人を招き，北は北海道から南は米軍占領下にあった沖縄まで，まさに全国を縦断するかたちで行われた。

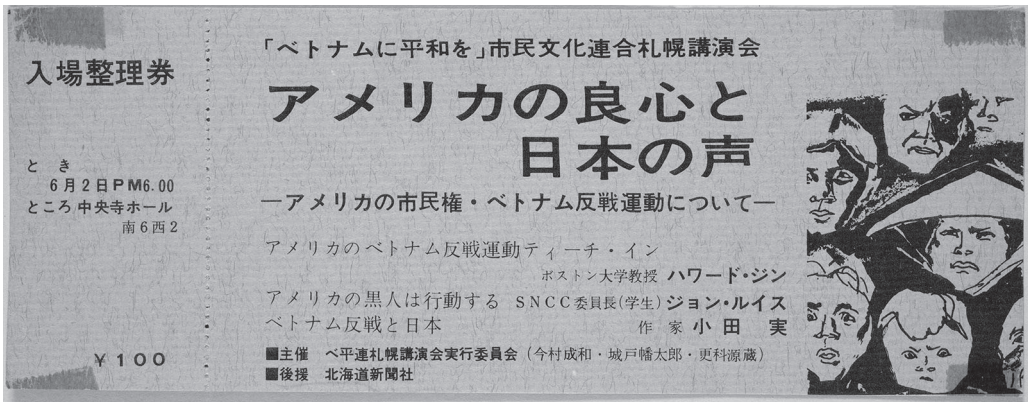


図3 「ベトナムに平和を」市民文化連合札幌講演会　アメリカの良心と日本の声（チケット）
6月2日の北海道での講演を皮切りに行われた全国縦断講演旅行には各地で多くの参加者があり，そこでの討議が小田の「加害」の論理にも影響を与えた。チケットにはジョン・ルイスとあるが，実際に来日したのは，ラルフ・フェザーストン。立教大学共生社会研究センター蔵

講演旅行の初日は，6月2日，北海道大学で行われた。ここでの小田のあいさつを見ると，加害の論理に直接言及した形跡は見られない。翌3日の東北大学での講演会での小田のあいさつには「アメリカと日本が安保条約というものを結んで，その中で我々はがんじがらめに縛られている。そしてそのことによって，我々はベトナムに対して，直接的に，間接的にアメリカの間違った戦争を援助することを行っているというのは明白な事実です[85]」と述べており，日米安保を介して加害者の立場に立っていることを指摘している。ただし，この時点での小田の認識は，加害と被害との連関を意識したものでは必ずしもない。小田の加害と被害の論理についてある程度まとまった発言が確認できるのは，6月11日の福岡での集会における学生からの質問に対する答えのなかに現れる。

「僕自身の出発点は何も日本が無罪だからアメリカを攻撃しているんじゃなくて，日本が有罪である，日本がそこにコミットしてるからやっておるんです。沖縄の問題，（僕がミシガン大学で喋ったのも沖縄の問題ですけれど）それからまた，いわゆる基地の問題，そういうことが，むしろ我々をコミットさせている。その我々がコミットしている日本政府を，アメリカ政府から切り離さなければならない。そういうことがもちろん出発点になっています[86]」。

具体的な日付は分からないが，この全国縦断講演旅行の前かそのさ中にアメリカからベ平連になされたある要請も小田の加害者論に影響を与えたように思われる。6月10日の広島で行われた座談会で，いいだももは以下のように述べている。

「私どものベ平連に，アメリカのレッドウッド・シティからこういう引き合いが来たことがございます。レッドウッド・シティには，『アゲインスト・ナパーム・ボンブ』（against napalm bomb）というナパーム弾反対の委員会がございます。そこから，我々ベ平連の方に手紙が来たわけです。レッドウッド・シティの日本における姉妹都市は平塚市であります。レッドウッド・シティの平和運動家は，平塚市の有志にこう呼びかけております。

『クリスチャン・サイエンス・モニター』という，アメリカにおける最大の新聞の一つの報道によれば，ベトナムにおいて投ぜられておるナパームの九十パーセントは，日本の二つの会社によって造られておるということが言われておる。レッドウッド・シティの姉妹都市であるあなたの国の平塚市において，ゼリー状石油であるナパームが造られておらないだろうか，もし造られておるなら

ば，姉妹都市として私どもは共同の闘争に起ち上がりたい，こういう引き合いであります。私どもベ平連では，微力ながら，そういうナパームを造っている工場を突き止めて，それに対して我々のあたう限り最大限の，非暴力にして，かつロジカルな闘争をかけようと思っております[87]」。

全国縦断講演旅行の記録を見る限り，加害と被害の論理について最も明確に話しているのは，小田らベ平連関係者ではなく，地方での参加者からであった。広島での懇談会（6月10日）の参加者だった二瓶敏は次のように述べている。

「戦禍に巻き込まれるという考え方の中には，やはり受身と言いますか，日本人は何も悪いことをしていないのに，巻き込まれるのは御免だという考え方，そういう発想法がやはりあったし，今の多くの日本人の中にも，やはりそれがまだ多いのではないかと思われます。日本がアメリカといろいろと堅く提携することを通じて，何も日本が悪いことをしていないのに火の粉がふりかかって来るという，そういう危険ではなく，むしろ日本が積極的にアメリカに結びつき，あるいはアメリカがやることを支援することによって，アメリカを励まし，アメリカの侵略的な行動を励ましている，そういう現実をやはり考えてゆかなくてはいけないのではないかと思うのです[88]」。

「平和運動というものを私たちが考えてゆく場合に，日本が単に巻き込まれるということだけではなく，一つの加害者として，あるいは加害者に対する加担者として，今，また出て来ているということ，これはやはり，日本としての非常に大きな責任問題であると思うのです[89]」。

このように見てくると，小田における「加害」の論理は，すでに小説『アメリカ』執筆後にきわめて重い問題として受け止められ，沖縄での経験を通してベトナム戦争と日本の関係を視野に組み込み，全国縦断講演旅行を行うなかで，ベトナム反戦に関する様々な意見が出され討議を重ねることを通して形成されていったと言えよう。また，いいだももが紹介しているアメリカの平和団体からのベ平連への働きかけが，ベトナム戦争における日本の具体的な関与という問題を提起し，そのことがより一層「加害」の論理を現在的関心から練り上げることにつながったとも言えよう。「難死」の思想が小田の個人的な経験を出発点とし，様々な現場に出かけていった小田の見聞と経験によって形成されたものであったとするならば，「加害」の論理は沖縄での経験とベ平連によるベトナム反戦運動に参加した様々な人々による意見のやりとりの積み重ねのなかから生み出されてきたものであった。

おわりに

ベ平連に参加する以前の小田の思想と行動，ベ平連への参加の具体的な経緯，そしてベ平連発足後の「加害」の論理の形成についての以上の検討から，次のような点を指摘できるだろう。

まず第一に，かなり早い時期から自らの戦争体験・空襲体験を世代認識と結びつけて捉えようとしていた小田は，アメリカ留学と世界貧乏旅行，その後の評論活動のなかで思索を重ね，その到達点として自らの戦争経験を基にした「『難死』の思想」を生み出した。「『難死』の思想」は，かつての戦争をどう考えるかという問題ばかりでなく，「難死」を起点として「私状況」優位の時代を若者として生きた小田らの世代が，戦後民主主義を身体感覚で吸収したという主張とも結びついていた。その意味で「『難死』の思想」は戦前・戦中と戦後を架橋する思想でもあったと言える。そして，政

治的には戦闘的リベラリズムを志向するようになった小田にとって，64年の暮れから翌年初頭にかけての沖縄旅行は大きな意味をもっていた。ベトナム反戦運動に主体的に参加する契機になったばかりでなく，ベ平連参加後に彼が提起した「加害」の論理を考えるヒントを提供したからである。

とはいえ，当時の小田は社会運動の未経験者であった。その小田にベ平連のスポークスマンとして白羽の矢を立てたのが鶴見と高畠であった。ベ平連結成の際の小田起用の経緯については，小田以上に石原慎太郎が有力な候補者であったという見方も存在するが，鶴見が残した『ヴェトナム・デモ』ノート等を中心に検証する限り，石原説は成立しがたいと言わざるを得ない。そして，小田が有力な候補者として浮上した背景には，久野収からの示唆があったのではないかと考えられる。

小田は，ベ平連発足の翌年に開催された日米市民会議で「加害」の論理を提示し，それは「平和の倫理と論理」にまとめられたと言われる。しかし，「加害」の論理は以前から小田の問題関心のなかにあったものであり，小説『アメリカ』に対する批判への小田の反応に示されるように，小田にとっては極めて難しい問題と考えられていた。しかし，沖縄での経験と，日米市民会議の前段として行われた全国縦断講演旅行を通して，小田は「加害」の論理を練り上げていった。とくに全国縦断講演旅行では参加者の側から「加害」の論理と明確に主張する意見も出されることもあった。小田の個人的な体験を出発点にし世代経験と密接に結びついて形成された「『難死』の思想」に対して，「加害」の論理は，当時のベトナム反戦運動のプロセスそれ自体から生み出された思想であり，それに表現を与えたのが小田の「平和の倫理と論理」であったと言えるだろう。

註

（1）――ベ平連の運動体としての特徴については，拙稿「1968年のベ平連―生成・共振・往還の運動のなかで―」［『思想』第1129号，岩波書店，2018年5月］，を参照されたし。

（2）――地域におけるベ平連の運動については，拙稿「戦後社会運動のなかのベ平連―ベ平連の地域的展開を中心に―」［『法政研究』第71巻第4号，2005年］，市橋秀夫「日本におけるベトナム反戦運動史の一研究」(1)～(3)［『日本アジア研究』第11～13号，2014～2016年］，黒川伊織「ベトナム反戦から内なるアジアへ―ベ平連こうべの軌跡―」［出原政雄編『戦後日本思想と知識人の役割』法律文化社，2015年］，同「いやがらせの思想―『ベトナムに平和を！』神戸行動委員会の経験」［『大原社会問題研究所雑誌』第697号，2016年11月］，大野光明『沖縄闘争の時代　1960/70―分断を乗り越える思想と実践―』［人文書院，2014年］，などを参照されたし。

（3）――代表的なものとして，道場親信「『難死』の思想と現代」［藤原書店編集部編『われわれの小田実』藤原書店，2013年］，小熊英二「解説―『作家』としての小田と『運動家』としての小田―」［小田実『「難死」の思想』岩波現代文庫，2008年］。

（4）――竹内洋『革新幻想の戦後史』［中央公論新社，2011年］。

（5）――たとえば，福間良明『「戦争体験」の戦後史―世代・教養・イデオロギー―』［中公新書，2009年］は，戦後における知識人の戦争経験とその認識の変化についての優れた分析を行っており，そのなかで小田の加害者論についても「戦場経験を持たない世代が，戦後体験としての『加害』の問題を『自己への問い』として捉え直す道筋を示唆するもの」と評価している。しかし，岩波同時代史ライブラリーでの「『難死』の思想」が再録された際［1991年2月］に小田が執筆した「まえがき」（さらに岩波同時代史文庫［2008年］では「あとがき」として掲載）での小田の議論とが混在して言及されているため，小田の「『難死』の思想」と「加害」の論理との関係が不明確になっている。

（6）――「『満州事変からインドシナ戦争まで』集会より―インタビュー武藤一羊さんに聞く」［『ベ平連ニュース』第61号，1970年10月，5頁，『ベ平連ニュース縮刷版』1974年，365頁］。

（7）――「あなたへの訴えかけ―集会『満州事変からインドシナ戦争まで』について」［『ベ平連ニュース』第60

号，1970年9月，1頁，『ベ平連ニュース縮刷版』353頁］。
（8）――小田実『明後日の手記』河出書房，1951年，215頁。
（9）――赤澤史朗「『戦争体験』と平和運動―第二次わだつみ会試論―」［『年報・日本現代史』第8号，2002年］24～26頁。
（10）――小松左京『小松左京自伝―実存を求めて―』日本経済新聞出版社，2008年，22頁。
（11）――同上，同頁。
（12）――同上，26頁。
（13）――同上，23頁。
（14）――『資料・「ベ平連」運動』上巻，河出書房新社，1974年，17頁。
（15）――同上，71頁。
（16）――小松左京「“平和的人数”の願い―『日米市民会議』に参加して―」同上，135～136頁。
（17）――鶴見俊輔・開高健・小田実編『平和を呼ぶ声―ベトナム反戦・日本人の願い―』番町書房，1967年，98頁。
（18）――前掲『資料・「ベ平連」運動』上巻，210～211頁。
（19）――『何でも見てやろう』が与えたインパクトについて，粕谷一希は「かつての留学イメージを百八十度展開させた新世代」の登場を意味したと指摘している［粕谷一希『戦後思潮―知識人たちの肖像―』藤原書店，2008年，324頁］。
（20）――小田実「へんな中学生」［小田実『日本を考える』河出書房新社，1963年，209頁］。
（21）――小田実「戦争は終わった」『朝日新聞』61年8月14日［前掲『日本を考える』，215～216頁］。
（22）――小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉―戦後日本のナショナリズムと公共性―』新曜社，2002年，757頁。
（23）――小田実『何でも見てやろう』河出書房新社，1961年，95～96頁。
（24）――前掲『何でも見てやろう』，349～350頁。
（25）――前掲『「難死」の思想』，1頁。
（26）――同上，同頁。
（27）――小田実「『あたりまえ』意識のなかの憲法」『世界』1962年6月号［前掲『日本を考える』，92頁］。
（28）――前掲『「難死」の思想』，2～3頁。
（29）――同上，4頁。
（30）――前掲『「難死」の思想』，19～20頁。
（31）――吉見義明『焼跡からのデモクラシー―草の根の占領期体験―』上，岩波書店，2014年，71頁。
（32）――同上，209頁。
（33）――同上，71頁。
（34）――道場，前掲「『難死』の思想と現代」，253頁。
（35）――飯沼二郎・小田実・北沢恒彦・鈴木正穂・鶴見俊輔「京都ベ平連をめぐって」［『復刻版　ベトナム通信』不二出版，1990年，1頁］。なお，鶴見は小田とは「二編会った程度」と述べているが，小田は「そのときまで私は鶴見さんにたしか一度しか会ったことがなかった」と回想している［小田実『「ベ平連」・回顧録でない回顧』第三書館，1995年，21頁］。
（36）――小田，前掲『「ベ平連」・回顧録でない回顧』，23～25頁。
（37）――小熊英二『1968〈下〉―叛乱の終焉とその遺産―』新曜社，2009年，308頁。
（38）――竹内，前掲書，355頁。
（39）――竹内，前掲書，同頁。
（40）――竹内，前掲書，356頁。
（41）――佐野洋『てっぺん野郎―本人も知らなかった石原慎太郎―』講談社，2003年，323頁。
（42）――上之郷利昭「ベ平連に何が起っているか」『諸君！』第5巻第4号，1973年4月，85頁。
（43）――吉川勇一『市民運動の宿題』思想の科学社，1991年，99～100頁。この吉川の回想に対応したかたちで，小田自身も「あとで長年『ベ平連』の運動の仲間になる『左』の人たち―私はこの『「左」の人たち』という言い方を愛して使うのだが，その人たちは，『また新手の右翼が出て来たと思った』とよく私に言ったものだ」［小田，前掲『回顧録でない回顧』，33頁］と述べている。
（44）――以上の記述は，『ヴェトナム・デモ』ノートの第一分冊に記されたメモによる。このノートに記載されているメモは，打ち合わせや話し合いの際の走り書きと，しばらく時間をおいて書かれたメモが混在している。ベ平連発足の経緯に関するメモのかなりの部分は楷書体で書かれており，しばらく後に備忘録的に書かれたものと思われる。しかし，記されている情報の内容からみて，ベ平連発足からそれほど間を置かない時期に記されたものと考えられる。
（45）――小田実「正攻法の魅力」［『中井正一全集』第二巻〈転換期の美学的課題〉付録『中井正一　2』1965年］。このなかで小田は「私にとって，中井正一氏の著作の魅力は，ひねこびない，裏からのねちねちさのない正面きった明るさにある。明るさということばが誤解をまねくなら，正攻法の魅力だと言ってもよい」［9頁］と述べている。
（46）――小熊，前掲『1968〈下〉』，308頁。
（47）――同上，899頁。

(48)――米谷ふみ子「世界的英雄，近所の洟垂れ小僧」［前掲『われわれの小田実』，68頁］。
(49)――『朝日新聞』1963年5月25日。
(50)――『朝日新聞』1965年2月22日，夕刊。
(51)――『朝日新聞』1964年12月26日，夕刊。
(52)――桑原武夫「序」［前掲『明後日の手記』，『小田実全仕事　月報1』河出書房新社，1970年，2頁］。
(53)――安岡章太郎「解説　孫悟空の孤独」［『小田実全仕事6』河出書房新社，1971年，420頁］。
(54)――鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの―鶴見俊輔に戦後世代が聞く―』新曜社，2004年，226頁。
(55)――鶴見俊輔『同時代―鶴見俊輔対話集―』合同出版社，1971年，181頁。
(56)――同上，183頁。
(57)――同上，190頁。
(58)――竹内，前掲書，366頁。
(59)――竹内，前掲書，367頁。
(60)――竹内，前掲書，368頁。
(61)――ただ，竹内が同書で小田と岸恵子の艶聞を「小田の躁状態のピーク時と重なる」［368頁］と述べているが，この艶聞がおきたのはベ平連解散後の1974年であるので，この説明は論理的な整合性に欠いている。
(62)――田邉園子『伝説の編集者　坂本一亀とその時代』作品社，2003年，86頁。
(63)――同上，10頁。
(64)――『小田実全仕事　1』，411頁。
(65)――『小田実全仕事　1』，413頁。
(66)――この真継の回想について，小熊はなぜか後半の「暗く鋭い目」の部分の方を引用して当時の小田の性格を説明しているが，「たくみな饒舌とあけっぴろげな性格」により「だれをも初対面から友人にしてしまう」という，ベ平連の時代の小田のイメージにつながる面もあったのである。
(67)――開高健「本質的な先生小田実」［『饒舌の思想』ちくま文庫，2009年，569頁，初出は『文藝春秋』1965年7月号］。
(68)――前掲，鶴見『同時代』，190頁。
(69)――小田実『戦後を拓く思想』講談社，1965年，191頁。
(70)――同上，122頁。
(71)――同上，125頁。
(72)――オグルズビー・北小路敏・小田実「座談会　青年と政治」［『文藝』第4巻第11号，1965年10月，298～299頁］。
(73)――ミシガン大学での小田の様子を鶴見良行は，次のように記している。
「1965年秋，アメリカのミシガン大学で行われたベトナム戦争に関する国際会議にわたしは小田や久保圭之助などといっしょに参加した。一夜かれは大講堂で千を越す聴衆を前にして，ヘンリー・ミラーなどとともに講演した。そのときかれは，主として沖縄について語ったのだが，沖縄の人間の人権がいかに抑圧されているかをひとつひとつの例をあげながら，ぶっきらぼうに，しかし早口にしゃべった。ひとくぎりするごとに小田は，どうだお前たちわかったか，といわんばかりにぎらぎらする眼で会場をねめまわした。そのたびに聴衆は拍手した。小田の英語は，お世辞にもうまいものではないが，ひとつことを思いつめた男の姿がそこにあって，わたしはひどく感動した。」［鶴見良行「ちいさな小田実」『小田実全仕事10　月報9』河出書房新社，1971年，7頁］。
(74)――小熊英二『1968〈上〉―若者たちの叛乱とその背景―』新曜社，2009年，68頁。
(75)――同上，68頁。
(76)――同上，同頁。
(77)――小熊，前掲『〈民主〉と〈愛国〉』，594頁。
(78)――道場，前掲「『難死』の思想と現代」，255頁。
(79)――同上，同頁。
(80)――小田実「甘美な逃げ口上」［小田実『壁を破る―世界のなかの体験と思想』中央公論社，1964年7月，220頁］，初出は『中国』第6号。
(81)――同上，221頁。
(82)――同上，222頁。
(83)――道場，前掲「『難死』の思想と現代」253頁。
(84)――小田実「平和の倫理と論理」［小田，前掲『「難死」の思想』，70～71頁］。
(85)――鶴見俊輔・小田実編『反戦の論理―全国縦断日米反戦講演記録―』河出書房新社，1967年，31頁。
(86)――同上，118頁。
(87)――同上，187～188頁。
(88)――同上，194頁。
(89)――同上，195頁。

（鹿児島大学法文学部，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2018年5月20日受付，2018年10月1日審査終了）

Reflections on Makoto Oda and Beheiren: Participation in Beheiren, the Ideology of Meaningless Death, and the Logic of Self as Aggressor

HIRAI Kazuomi

Established in April 1965, the Beheiren (peace for Vietnam! civil coalition) played a significant role as a civil movement in the development of the anti-war peace movement in post-war Japan. The intellectual, Makoto Oda, led the group as Beherein's "representative."

Although the ideology and actions of Makoto Oda have often been discussed in previous studies of the Beheiren, some aspects still remain unexamined including the details of his participation in the Beheiren and the process of the formulation of his ideas such as meaningless death, and the logic of self as aggressor. The author of this paper use some documents from the exhibition, "1968: A Period of Eruption of Countless Questions," to consider certain issues such as the course of Oda Makoto's actions up to the time he joined the Beheiren, the background to Makoto Oda's appointment when Beheiren was established, the process of formulation of the ideology of meaningless death and the logic of self as aggressor, and the relationship between these two.

Given this outline, the author focuses initially on the characteristics of Makoto Oda's generation (the generation born around the time of the "Manchurian Incident") and identifies the course of formation of his ideology of meaningless death while linking it to the experiences unique to this generation. Next, the author examines previous explanations by Eiji Oguma and Yo Takeuchi with regard to the appointment of Makoto Oda when the Beheiren was established, and clarifies the following facts: the option of selecting either Makoto Oda or Shintaro Ishihara as the representative of the Beheiren did not exist; the course of Makoto Oda's discursive activities in the early 1960s was the line of thought espoused by militant liberals; and there was a measure of legitimacy for Makoto Oda among the intellectuals who belonged to the Beheiren.

Further, Makoto Oda's logic of self as aggressor is examined. This notion has been explained so far in connection with the 1966 Japan-U.S. Citizens' Conference. Actually, the logic of violence existed in Oda's awareness of issues prior to his participation in the Beheiren. However, the present study elucidates the fact that Makoto Oda had grasped that the problem was quite complicated, that the experience of visiting Okinawa prompted him to actively confront this issue, and that the logic of self as aggressor was an idea formulated within the context of the movements that occurred at that time rather than being an conception that was unique to Makoto Oda.

Key words: Beheiren, Makoto Oda, the ideology of meaningless death, the logic of self as aggressor